

# 教員養成のための TT による古典文学演習の開発

— 『枕草子』 を用いて —

Developing Classical Literature Exercise for Teacher Training through Team Teaching:  
Using *Makura no Soshi* (*The Pillow Book*)

平川恵実子, 村井万里子

HIRAKAWA Emiko and MURAI Mariko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 36 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.36, Feb, 2022

## 教員養成のためのTTによる古典文学演習の開発

— 『枕草子』を用いて—

### Developing Classical Literature Exercise for Teacher Training through Team Teaching: Using *Makura no Soshi* (*The Pillow Book*)

平川恵実子\*, 村井万里子\*

\*〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学  
HIRAKAWA Emiko\* and MURAI Mariko\*

\*Naruto University of Education  
748, Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502 Japan

**抄録：**本稿は鳴門教育大学の2年生を対象に行った『枕草子』の演習授業の実践をまとめたものである。本授業はそれぞれ古典文学と国語教育を担当する2名の教員によるTT (Team Teaching) で行い、各専門分野における研究方法や知識を共有しながら進めた。受講生の学習の目標の1つは、古典文学を現代語訳することなく理解することであるが、そのために大村はまの「傍注テキスト」を受講生に作成させるとともに、事前に音読の指導を行った。また、史実を踏まえた読解をすることを2つ目の目標とし、『枕草子』の中でも実在の人物が登場する章段を中心に取上げた。演習発表の内容と授業後の受講生の感想とを確認し、本授業の方法に一定の効果があると見なすことができた。

**キーワード：**国語教育, 教員養成, 枕草子, 音読, ティーム・ティーチング

**Abstract :** This study summarizes the results of a practice seminar on *Makura no Soshi* (*The Pillow Book*) given to second-year students at Naruto University of Education. The class was held in a team-teaching (TT) format, with instructors of classical literature and Japanese-language education who shared the research methods and knowledge from their respective fields. One of the learning objectives for students was to understand classical literature without translating it into modern language. For this, the students were required to create Hama Omura's annotated text. The students were also taught how to read the text aloud beforehand. The second objective was for the students to learn to read the text based on historical facts. Therefore, the class mainly focused on chapters where actual historical figures appeared. The results suggest that, based on the content of the seminar presentations and the students' remarks after the class, the method followed in this class has certain effects.

**Keywords :** Japanese-language education, teacher training, *Makura no Soshi* (*The Pillow Book*), reading aloud, team teaching

#### I はじめに

本稿は2020年度に行った鳴門教育大学の学部2学年を対象とする「初等中等教科教育実践Ⅱ (国語)」における授業の実践をまとめたものである。本授業では初等・中等国語科の教科内容力の育成のために、教材研究力を高めて授業の構成展開力の素地を養うことを目的とし、主に古典文学を取り上げている。教科専門 (古典) 教員と、教科教育 (国語) 教員の2人が担当し、授業 (15回) と、学生の演習発表前の事前指導をTT (Team Teaching) によって行った。

古典文学に関する授業としては他に、学部2年前期開講の「国文学Ⅱ」があり、上代から近世までの文学作品

を講義形式によって概観している。その後同年後期開講の本授業では、演習形式によって受講生自身が古典作品の読解に取り組むことになる。

#### II 古典の学習についての問題

本授業の受講生が無意識に持っている考え方として、古典文学読解の到達点は現代語訳を作成できることという思い込みがある。不明な古典語に出会った時に辞書を引き、文脈に合った現代語に置き換えるという作業は古典学習で不可欠の作業ではある。しかし、学生の辞書の引き方を見ていると、辞書に掲載された例文を見ることなく、列挙された現代語の意味にあてはまるものを手っ

取り早く特定しようとする傾向にあり、文脈を読み取ったり、その言葉がどの時代に使われていたかを考慮したりする意識は希薄であり、まるで古典語と現代語のパズルをしているかのような機械的な作業になっている。入試問題等に現代語訳を問う問題が出るため、同情すべき面もあるが、それならば古典文学は現代語訳で学ばばいいということになる。近年開催された明星大学日本文化学科シンポジウム「古典は本当に必要なのか」においても、否定派として登壇した前田賢一氏は、古典の内容を学ぶのは古文でなくとも現代文で良いとの見解を示された。これに関連してフロアからは日本文学研究者の前田雅之氏が「古典の文章は、連想と記憶を中心に作られていて、近代の論理でできていない。ですから訳したら必ず無理が出ます」と発言している。(ただし、否定派の意見に共通するのは、現代社会において学習内容が増加する中、児童生徒が現代語のリテラシーを身につけることを優先させるために古文の学習を必須とする必要がないという主張であり、古典に価値がないという意味ではない。)

本授業の受講生達は教職への高い意欲を持ってはいるが、国語科の授業に古典がなぜ必要なか納得していない様子が見受けられることもある。しかし、現代語につながるのが古典語であり、古典を学ぶことは未知なるものを学びながら自己と関係づける行為である。過去の文化を表現する古典語は、現代語・現代文化とつながりつつ異なっており、古今に通じる普遍性と変化の様相を捉えることのできる教材ともいえる。教職を目指す受講生は、古典作品に描かれた文化についての調べ方を知り、知識を蓄え、文化が言葉によって表現されることを認識する必要がある。受講生が国語の教科書に載っているからというだけの理由で古典を教える教員にならないようにするためには、受講生が古典をなるべく古典語で理解し、各々が古典に親しみ、古典の価値を実感することが必要だと考えた。それは、原文のよくわからない状態から、意味が次第にわかってくる過程のダイナミズムを体験することである。

そのため、本授業では、従来活動のゴールを模擬授業としていたのを改め、古典の教材研究の成果発表(演習発表)を行うことにした。その際、音読を重視し、「傍注テキスト」作成を必須要件とした。教材として選択したのは、中学校・高等学校の教科書に採択され続け、受講生になじみのある『枕草子』である。

### Ⅲ TT (Team Teaching) の意義

#### 1. 教科専門(古典)教員の担う役割

本授業で教科専門(古典)教員(以下、古典教員)が担うのは、受講生に学ばせる内容の中核を築くことであ

る。授業では学生の演習発表の前段階として1回分講義を行い、『枕草子』の諸本の紹介や、最良の本文を定めるための本文校訂作業、それらをふまえた教科書の『枕草子』の掲載のされ方、作品の歴史的背景の調査方法、文章表現の読解方法などを解説する。

ただし、上記の基礎的な研究手法は、そのままの形では教育現場に導入できない。学習者に上記内容を知識として教えても、形式的な面に目を奪われ、古典の価値を認識するまでに至らない。専門的知識を小・中学校で学習者に届きやすい方法で還元できるようになるためには、教科教育(国語)教員が持つ教育現場についての知識や、教育理論を考慮しつつ授業を進める必要がある。

#### 2. 教科教育(国語)教員の担う役割

教科教育(国語)教員(以下、教科教員)が担うのは、主に言語獲得のための言語活動の設計である。そのために、こちらも演習発表の前に1回分講義を行い、受講者の古典学習観の問題を指摘し、古典教員とも共有した。そして、受講生に対して、①音読指導、②授業の構成・実施・省察の設計を行った。②については言語教育の原理(言語4相・対話環=言語獲得の原理)<sup>注1)</sup>に即した古典の学習活動の設計を目指す。授業の構成の一環として重視することの一つが、「傍注テキスト」の作成方法の提示と指導である。これらについて省察し、TTを組む古典教員の専門技能を補助し、学習者にとって有効な教育資材として引き出すのが、教科教員の役割である。

以上をまとめると、古典教員と教育教員とのTTでは、以下のような利点が考えられる。

- ①古典教員の貢献：古典研究の最新成果をふまえた専門的知識・調査法を提供する。
- ②教科教員の貢献：言語教育の原理に即して古典の学習活動を設計し提案する。

また、古典教員と教科教員という立場の違う教員が1つの教材について意見交流をしながら協力する姿を受講生に見せることで、指導者が自ら古典を学び、親しんでいるロールモデルに触れさせることもできる。

### Ⅳ 授業の進め方

#### 1. 『枕草子』と章段の選出理由

本授業で『枕草子』を選択した理由は、先述のように受講生にとってなじみのある作品だからである。冒頭の「春はあけぼの」は中学校の教科書に長年掲載されており、暗誦した経験のある者も多く、現代版「春は…」の作成を経験した学生もいる。日本の四季を描写した教材に親しみを覚える者が多い一方、高等学校で第299段「雪のいと高う降りたるを」を学習したことで、中宮定子から「香炉峰の雪」を問われて当意即妙の応対をした作者

清少納言の自慢話としての印象を持つ学生もいる。しかし、本授業でテキストとして指定した岩波文庫版『枕草子』巻末の池田亀鑑による解説では次のように述べられている。

『枕草子』はすぐれた知性によって支えられている文学である。(中略) 分類の諸段また感想・評論の諸段を通じて、我々は平安中期における生活と感覚の具体相を万華鏡を見るようにうかがい知ることができるのであるが、それを同時に我々が文学として享受し得るのは、ひとえに作者の卓抜なる散文家としての稟性によるのである。また日記的章段に見る作者の高い志操と、中宮定子との美しい魂の触れ合いが、全体としてのこの草子の文学的香気の高さの淵源をなしていることも知らなければならない。「かりそめの筆さびなりける枕草子をひもときはべるに、うはべは花もみちのうるはしげなることも、ふたたび三たび見もてゆくに、あはれにさびしきげぞ、この中にもこもりはべる。」とは一葉の言であるが、若くして逝った才媛のこの共鳴には、『枕草子』の総てが語り尽くされているといってもよい程の含蓄がある。」(傍線-引用者。以下、特にことわらない限りは引用者による)

すなわち、『枕草子』の日記的章段の解釈と享受は中宮定子との交流に鍵があるというのである。『枕草子』は伝本によって章段の分け方や配列順に違いがあるが、全体として約300の章段があり、類従的章段・日記的章段・随想的章段の3つに分類して把握することが一般的である。類従的章段とは、「～もの」「～は」(例:「にくきもの」,「木の花は」等)で始まる章段、日記的章段とは、清少納言が体験した後宮生活を記録した章段、随想的章段とは、「春はあけぼの」などの自然や人事に対する観察を書いた章段である。これらの分け方は清少納言が意識したものではなく、後世の研究者によってなされたものであり、章段区別は流動的である。

定子は長徳元年(995)に父である関白藤原道隆の死を境にして窮地に追い込まれていき、日記的章段の背景は劇的に変化するのであるが、「日記的章段に見る作者の高い志操と、中宮定子との美しい魂の触れ合い」と言われるのは主として道隆死後の諸段である。『枕草子』の随想的・日記的章段に描かれた時期に注意するのは、『枕草子』読解のハイライトの一つであろう。受講者の多くが抱えている『枕草子』の「うはべ」の美しさや明るさだけでなく、「あはれにさびしきけ」という雰囲気を読み取り、そのようになった歴史的な理由を調査し、知識として蓄えることが教職を目指す受講生にとっては言語獲得の一環となろう。

また、定子や道隆以外の実在の人物の基礎事項を辞書やその他の先行研究によって調べ、人物関係の相関を自

分なりに納得できるまでになり、それらを資料にまとめ、教室で解説できるようになる能力を養うために、フィクションではない作品として『枕草子』は有益であろうと考えた。

本授業では古典教員が『枕草子』から下記の11段を選出し、21名の受講生が3～4名の発表班を作り、全員が2回ずつ発表することとした。

- ・第28段「にくきもの」
- ・第37段「木の花は」
- ・第39段「節は五月にしく月はなし」
- ・第83段「かへる年の二月廿日よ日」(藤原齊信が登場)
- ・第84段「里にまかでたるに」(橘則光、藤原齊信<sup>ただのぶ</sup>が登場)
- ・第119段「あはれなるもの」(藤原宣孝が登場)
- ・第137段「五月ばかり、月もなういとくらきに」(藤原行成が登場)
- ・第182段「村上の前帝の御時に」(一条天皇の祖父、村上天皇が登場)
- ・第277段「御前にて人々とも」(定子が登場)
- ・第299段「雪のいと高う降りたるを」(定子が登場)
- ・第313段「大納言殿まゐり給ひて」(一条天皇、藤原伊周<sup>これちか</sup>が登場)

これらは、比較的短くまとまっている章段の中から、受講生が親しみを覚えやすいのではないかと想定され、且つ年中行事などの文化が学べることが期待される類従的章段と、日記的章段・随想的章段の中から、一条天皇、藤原伊周、藤原齊信など、実在の人物が登場する段を中心に挙げた。また、担当章段を理解するために、積極的に上記以外の他の関連する章段をも読むように促した。発表順は章段番号順である。章段番号は岩波文庫版『枕草子』に拠る。

## 2. 事前指導

### 1) 傍注テキスト

発表班に対しては、班員全員に対して、TTで音読の事前指導(約90分)を実施した。事前指導のために、受講生にはあらかじめ「傍注テキスト」の作成と、音読の練習をしておくよう指示しておいた。

「傍注テキスト」とは、著名な中学教師大村はまが昭和49年(1974)に「じかに古典にふれさせるくふう」として発表して以来、古典指導の実践研究で常に用いた古典テキストである。「じかに」とは、本文(古文)を現代語訳で理解させるのではなく、なるべく原文そのまま理解するための工夫とい

◁また、ある女官は  
十日よりもう少し  
はありなし  
など

(傍注テキスト例)

うことである。

大村はま(2005)は「傍注テキスト」について次のように述べている。

今日、読む速さが話題になっていました。生徒が読みたいお話でした。あのテキストは、古文の調子を味わいながら意味はとりたてた説明なしに、自然に心に浮かんでくるようにと思って工夫したものですから、まん中の原文を読むのは、私です。(中略)ですから、これを見て、いきなり「読んでごらん下さい」ではなく、先生が読んで聞かせるのです。

「傍注テキスト」は古文の原文と意味がなるべく目移りすることのないよう考えられており、授業者が音読すると、古文を古文のまま理解する助けとなるというのである。本文(古文)を大きく中心に置き、その左側に旧仮名遣いで読み方を、右側に短い言葉で現代語の意味を小文字で添える(傍注テキスト例)。中央の本文を音読すると、左側の読み方と右側の意味とが自然に目に入るようになり、読み慣れると中央の本文のみを注視して読み進めることができる。ただし、大村はまの「傍注テキスト」は中学生向けであるため、古文単語の文法的説明は少ないが、本授業で作成する「傍注テキスト」は、単語に区切り、文法事項も重要な箇所限定して付すこととした。

学生は、この「傍注テキスト」を作成することで、古典の本文自体を書き写し、徹底して分析することになる。授業において、「傍注テキスト」作りは学習者のためであるが、実は授業者にとっても有益な基礎作業である。

## 2) 音読

上記のように、「傍注テキスト」は音読と不可分で考えられている。そして、国語科の授業において、音読とは単なる文字の音声化ではない。内容を声で表現することである。したがって、音読の指導は読解の指導と連動する。そのため、音読の指導は主として教科教員が行ったが、古典教員も随時、内容理解のための助言を行った。

大村(2005)は傍注テキストを用いた音読について、次のように述べている。

目の幅、見える幅がありますから、子どもは聞きながら、しかしただ聞いているのではなく、ともに読みながら、横に書いているのがちゃんと追っていきけるように、ゆっくり、しかし、古文のリズムをこわさないように読むのです。前にも申しましたように、聞きながら、意味はちゃんと胸に現代文で入ってくるというのが、このテキストのみそなのです。(傍点-原文ママ)

大村はゆっくりと、聞き手の理解を考慮に入れた音読をすることを推奨している。しかし、事前指導のはじめに受講生の音読を聞いてみると、本文を間違えずに読み

上げることに気を取られ、どのように聞き手に伝わるのかを考慮するまでに至っていないことが多い。自主的に音読の練習をしてきたとしても、内容にまで思いが至らず、言葉に意味が伴っていないのである。それは、授業者の声や、自分の声に乗った意味を聞き取る習慣をつけてこなかった、音読を軽視した学習経験のせいともいえよう。それらを自覚させる意味でも、事前指導においては、ゆっくりと、他の受講生が古典の世界を脳裏に描きやすい間の取り方や強弱の付け方や、まとまった意味を意識した必ずしも読点によらないフレーズ意識等を指導した。

第39段「節は五月にしく月はなし」の冒頭を例に挙げると、本文は下記の通りである。

節は五月にしく月はなし。菖蒲・蓬<sup>さうぶ よもぎ</sup>などのかをりあひたる、いみじうをかし。九重<sup>ここのへ</sup>の御殿の上をはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、いかでわがもとにしげく葺<sup>ふ</sup>かんと葺きわたしたる、なほいとめづらし。いつかは、ことをりにさはしたりし。

本段では人々が楽しげに菖蒲・蓬を用いて端午の節句の準備をする様子が描かれる。清少納言が5月に良いイメージを持っているのは、「しく月はなし」「をかし」「めづらし」「いつかは、ことをりにさはしたりし」に表れているが、これらを意識して、それぞれどのような声音で読んだらよいかを考えさせた。そもそも、端午の節句に菖蒲や蓬を用いるのは、その香気の高さが邪気を払うと考えられたからである。音読する者としては、野にある状態ではなく、人々が生活に菖蒲・蓬を使う様を楽しんでいる様子を脳裏に思い描くのが望ましい。また、屋根に菖蒲や蓬を指そうとするのは「九重の御殿の上をはじめて、いひしらぬ民のすみかまで」、つまり、内裏でも庶民の家でもという身分による対比を書いているが、これも音読する学生が当時の内裏の屋根や、庶民の家の屋根が理解できていなければならない。そのためには、自ら辞書その他の参考書にあたる必要がある。また、「いかでわがもとにしげく葺かんと葺きわたしたる」のうち、「いかでわがもとにしげく葺かん」は屋根の下に住む人の思いである。「どうやって我が家にたくさん指そうか」という感情を想像し、そこに邪気を払い住む者の健康を願う文化を理解しながら古文を読み上げることができれば、聞き手が現代語ではなく古文そのまま古文を理解することの助けになるだろう。そのためには現代語とは異なる表現である「いかで」や「しげく」の意味を理解することも必要である。

また、すべての事前指導を通して多くの学生に読み癖として見られたのが、不自然に語尾が上がる読み方である。語尾の上がる箇所を「↑」で示す。

(例) 節は(↑)五月にしく月はなし。菖蒲・蓬などのかをりあひたる(↑)、いみじうをかし。

他者に対して呼びかけるように読もうとする意識が働いたからなのかもしれないが、聞き手にとっては文章の意味を理解することへの妨げになる。無意識のことゆえにこの問題を克服することは困難であるが、個人的な指導を求めてくる学習意欲の高い学生の場合は、音読の意味に高い確率で気づき、その後、読み癖は直っていった。

こうした音読の指導は、学校の教室で児童・生徒に向けて範読することを想定している。多数の聴衆に対して行う範読の際は、一対一の会話とは異なったスピード感が求められる。それは古典の授業のみならず、現代文やその他の科目にも応用可能な汎用性の高い能力を養成することにもつながると考えられる。

## V 授業の例

演習発表は、1コマ(90分)につき1班が行った。発表班が作成した配布資料の構成は、①「傍注テキスト」、②語釈、③考察、④参考文献である。発表方法は、まず、事前指導で指摘されたことを踏まえて、「傍注テキスト」を2回音読する。1回目は本文通りに音読し、2回目は教師が教壇で児童・生徒に解説することを想定しながら、「傍注テキスト」の本文横に付した意味や発表資料(主に②語釈)の内容を適宜加えながら音読する。その後、先行文献を元に読解した内容を、③考察として解説する。

教員からは、毎回受講生全員にコメントペーパーを配布し、発表を聞いて(して)気づいたことや感想と、自分の課題とを書かせた。以下、2つの章段について、発表内容とコメントペーパーの一部を紹介する。

### 1. 第277段「御前にて人々とも」

#### 1) 発表内容

本段の梗概は次の通りである。

ある時、定子に清少納言が「世の中が煩わしく思った時でも白く美しい紙、上質の筆、上質の紙を手に入れると心が慰められる。また高麗縁の敷物を広げて見ると命が惜しくなる」と申し上げたことがあった。その後しばらくして清少納言は思い悩むことがあり、里居していると、定子から上質の紙が文とともに贈られた。その2日後にも、召使いが訪ねてきて、高麗縁の敷物を渡して去ったが、こちらは贈り主がわからない。後日、中宮付きの女房に文を遣って尋ねたところ、定子が贈ったことがわかった。

この章段について、発表班の資料から3つの発表内容を紹介する。

#### ① 本章段の史実年時

発表資料では、まず、本章段の史実年時について、『枕草子大事典』を引きながら解説がなされた。清少納言が

仕えた藤原定子(977～1000)は、藤原道隆と高階貴子の間に生まれ、正暦元年(990)1月、11歳の一条天皇に14歳で入内し、同年10月に立后した。清少納言が定子の元に出仕したのは正暦4年(993)年であり、定子より11歳年上の女房となった。長徳元年(995)4月、関白藤原道隆が病で死去し、その後、定子の兄伊周と叔父にあたる藤原道長の確執が表面化する。翌長徳2年1月には伊周・隆家の従者が花山天皇を射た長徳の変が起こり、伊周は太宰権帥、隆家は出雲権守として流罪になる。これをきっかけに定子は落飾、その上、同年には母貴子も死去する。このような歴史的事実を踏まえ、本章段の前半部は年代推定を可能にする記述がないため史実年時は不明、後半部は長徳2年(996)の秋と推定がなされた。長徳2年1月は、長徳の変後であり、定子の周囲に暗雲が垂れ込めた時期である。清少納言が宮中から里に下がっていたのは、藤原道長に内通しているという噂を立てられ、のけ者にされていたことに不快を感じていたことであると説明がなされた。

#### ② 「とくまゐれ」などのたまはせてについて

清少納言の里居中に、定子から紙20枚が贈られた。本文は下記の通りである。

さてのち、ほど経て、心から思ひみだるる事ありて里にある頃、めでたき紙二十を包みて賜はせたり。仰せごとには、「とくまゐれ」などのたまはせて、「これはきこしめしおきたることのありしかばなむ。わろかめれば、寿命経もえ書くまじげにこそ」と仰せられたる、いみじうをかし。思ひ忘れてたりつることをおほしおかせ給へりけるは、なほただ人にてだにかしかべし。

傍線部の「とくまゐれ」などのたまはせての「で」は打消の接続助詞であり、「早く参上せよ」などとおっしゃらないで」という意味になる。定子は里居をしている清少納言へ紙を贈りながらも、我が元に戻ってくることを催促していないということである。そして、定子が紙を贈ったのは、「これはきこしめしおきたることのありしかばなむ…」と、以前清少納言が気分を害したときには紙によって心が慰められることを定子の前で話したのを覚えていたからだと言い、それを清少納言は「いみじうをかし」と感じたのである。

この部分は、テキストによっては、「とくまゐれ」などのたまはせて」とする場合もあるが、こちらは逆に「早く参上せよ」などとおっしゃって」という意味になる。

発表資料では「のたまはせて」説について、『枕冊子全注釈』と『枕草子環解』を参考にしつつ、この文の直前の「仰せごとには」に注目した。定子は清少納言に表向きの言い分としては「とくまゐれ」と言い、その後、「これはきこしめしおきたることの…え書くまじげにこ

そ」と、以前定子が私的に聞いた清少納言の紙への思いを続けた。それに対して清少納言は「いみじうをかし」と感じたというのである。

この「で」か「て」かについては、高校までの授業ではほぼ取り上げられない問いであろう。発表班は授業で指定したテキストをきっかけに、『枕草子』の注釈書を複数参照する過程を経て、本文が確定していない問題に直面した。そして、次のように結論を述べた。

私たちは、前者の「**「とくまゐれ」などのたまはせで**」の説を採用した。この文は、清少納言が思い悩んで実家に帰っている場面が出てくる。この時期、彼女にとって宮廷は居心地の悪い場所であった。それを考慮すると、清少納言は「中宮様はそもそも、そんな宮廷への再出仕を私に命じなかった」と言い、中宮の心遣い、思いやり、優しさをアピールしたのではないかと考えられる。

### ③ 「かけまくもかしこき神のしるしには鶴のよはひとなりぬべきかな」の解釈

定子からの紙の贈り物を喜んだ清少納言は、返歌を使いの者に託す。

心もみだれて、啓すべきかたもなければ、ただ、  
「かけまくもかしこき神のしるしには鶴のよはひとなりぬべきかな  
あまりにやと啓せさせ給へ」とてまゐらせつ。だいばん台盤  
どころ まかし所の雑司ぞ、御使には来たる。

和歌に詠まれた「神」は「紙」を掛けており、定子からの贈り物を指す。「鶴のよはひ」とは、長寿を意味し、定子からの紙のおかげで鶴のように千年も生きられそうだという意味になる。寿命を詠み込んだのは、本段冒頭において、里居をする以前に清少納言が中宮へ紙への思いを次のように述べたことを踏まえている。

世の中の腹立たしう、むつかしう、片時あるべき心地もせで、ただいづちもいづちも行きもしなばやと思ふに、ただの紙のいと白うきよげなるに、よき筆、白き色紙、みちのくに紙など得つれば、こよなうなぐさみて、さはれ、かくてしばしも生きてありぬべかめりとなむおほゆる。

清少納言は、世の中が腹立たしく煩わしい時に紙を得られたら、生きていてもよさそうだと思えると話していた。それを踏まえて、この和歌を詠んだのである。そして使いの者に和歌を渡す際、「あまりにやと啓せさせ給へ」と言って手渡すのだが、発表資料ではこの時の清少納言の心情を次のように書いている。

自分自身でさえ忘れていたことを中宮が覚えていてくれて、さらに、実際に贈り物をしてくれるという言葉にならないほどの喜びをこの歌に込めたのだろう。「大袈裟すぎるでしょうか」と、表現が大袈裟

だとは思っているがこれほどの表現でも表せないほど嬉しいということの中宮に伝えたかっただろうと考える。

本発表の①～③の考察の過程において、定子と清少納言は主従関係にあるが、職務を超えた親愛の情を感じ取っている様子である。

### 2) 受講生の感想

- ・最初にどの年代の話なのかについての説明があり、話に入りやすかった。
- ・背景をふまえた上で、本文を読むことの大切さがわかった。深く読むとどんどん考えるべきところが出てくることがわかった。
- ・私の今までの『枕草子』周辺の知識はほとんど日本史の学習から得た知識であると気づいた。国語、古典の授業でもっと取り上げるべきなのでは？と思った。
- ・中宮定子の優しさや清少納言との信頼関係と共に中宮定子のスマートさが感じられる段だと思った。前に言った紙の話覚えていたのは定子が清少納言を大切に思っていた証だし、それを弱っている時に贈るといのは現代の私達がサプライズとして友達を驚かせたり喜ばせたりするのに通ずるものがあると感じ、親近感や人間味があって面白かった。
- ・定子が清少納言のことを大切にしているし、清少納言も定子のことをとても大切に尊敬しているというのが伝わってきた。些細な一言もちゃんと覚えていてくれて、贈り物もしてくれるところが本当に素敵だと思った。そして、「はやく参上しなさい」とは言わないところが自分のことよりも清少納言の心身のことを考えて接していることがよくわかる。自分が仕えている人がこんなにも素敵の人だったら、自分もこの人のためにがんばろうと思えるし、こんな人になりたいなって思える。
- ・この2人は主人と従者という関係だが、お互いを尊重し合っている素敵なお互い関係だと思う。
- ・数多の考察がある中で自分自身の考えを見つけ出すことが大切だと思った。

### 3) 考察

本章段は清少納言の里居中の出来事であるが、定子に降りかかった不幸な出来事と関連付けることによって、主従関係の有様を考察したところに意味があるだろう。『枕草子』の中で、定子の不遇が直接述べられた箇所はほとんどない。そのため、『枕草子』だけを読んでも歴史的事実を知ることは難しい。それを発表班は先行研究を読むことで、他の受講生は発表を聞くことで実感できたようである。定子や清少納言が生きた時代は平安期に摂関政治が行われていた時期であるが、高校では国語科

より社会科の時間に詳しく取り上げられる内容である。複数の教科で学んだことを自らが統合する必要があることも、受講生は再確認できたようである。

## 2. 第299段「雪のいと高う降りたるを」

本章段は短いので、全文を引用する。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃すびつに火おこして、物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高くあげたれば、わらはせ給ふ。

人々も「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、此の宮の人にはさべきなめり」といふ。

本章段は教科書に取り上げられることも多く、清少納言の自慢話という認識をもち、そのため『枕草子』への興味が減退していると言う学生も多い。本発表からは2つの発表内容を紹介する。

### ① 本章段の史実年時

本授業で定子の生涯を学んできた学生は、本章段においてもいつの出来事なのかという視点で読解に取り組んだ。手がかりとしたのは、末尾の「なほ、此の宮の人にはさべきなめり」という、定子に仕える女房達が清少納言を評した言葉である。発表班はこれを「やはりあなた(清少納言)は、この中宮様にお仕えする人としてふさわしいようだ」と解釈し、女房達がまだ清少納言に全幅の信頼を置いていない時期の話ではないかと推測した。

女房達が清少納言に全幅の信頼を置いていない頃はいつかという疑問に対しては、2つの時期が提示された。1つは、清少納言が定子の元に出仕した正暦4年(993)から道隆の死の長徳元年(995)までのいずれかの冬である。長徳元年は定子の人生が暗転し始める年であり、これ以降は本章段のように定子を中心として女房達が集まり語り合うような和やかな時間を持つことは難しかったらうというのがその理由である。2つ目は、長徳の変に際して、清少納言が女房達から藤原道長方につこうとしているのではないかと疑われたため、一時期宮中を離れた後の長徳3年(997)である。この時、中宮御所は職曹司にあり、内裏ではなくその周辺区域である大内裏に位置している。第143段「殿などのおはしまさで後」には再出仕したばかりの清少納言の描写がある。

御返しまゐらせて、すこしほど経てまゐりたる、いかかと例よりはつつましくて、御几帳にはたかくれてさぶらふを、「あれは今参りか」などわらはせ給ひて…

定子から我が身を気遣う手紙を受け取った清少納言は、少し経ってから再出仕した。気が引けながら几帳に

隠れて定子の様子をうかがっている清少納言を見た定子が、「あれは新参者か」と笑う場面である。清少納言の緊張感のある様子や、清少納言に試すような問いを投げかけて会話を楽しんでいる定子の様子が第299段と似通っていると発表班は述べた。

上記2つの説を紹介した上で、発表班は前者の説をとった。その理由として、長徳の変後、定子は落飾し、再び宮中に戻ってきた後も、定子を中心にした和やか且つ華やかな集まりをすることは難しいのではないかと述べた。そして、本章段は清少納言が初出仕した正暦4年(993)年の冬の出来事ではないかと結論づけた。

### ② 「香炉峰の雪いかならむ」の意図

発表班は、定子が清少納言へ問いかけた「香炉峰の雪いかならむ」について、清少納言の知識を試そうとしたという説を引いた上で、その説に反論を試みた。その根拠として、定子付きの女房達は漢詩文への関心が高く、出典の想起も早いことを指摘する。その例として挙げたのが第83段「かへる年の二月廿よ日」である。藤原齊信が趣深い西の京の様子を定子付きの女房なのである宰相の君に話して聞かせた際、「垣などもみな古りて、苔生ひてなむ」との言葉に対して宰相の君は『白氏文集』4、驪宮高「翠華来らずして歲月久しく、牆かきに衣有り、瓦こけに松有り」(原漢文)を踏まえて「瓦に松はありつるや」と返したというエピソードがある。また、第94段「上の御局の御簾の前にて」では、定子達が一日中琴を弾いたり笛を吹いたりして過ごした日に、定子が琴を持つ様子があまりに美しいので、清少納言が他の女房に「半ば顔を隠していたという人もこれほどまでではなかっただろう」と、白楽天の「琵琶行」の一節「なほ琵琶を抱いて半ば面を遮かくす」(原漢文)を踏まえて言った。その女房が清少納言の言葉を定子に伝えたところ、定子もまた「琵琶行」を踏まえて答えたという場面がある。これらのように、定子を中心としてその女房達にも漢籍の素養があった。そのような状況でわざわざ雪の降る風情ある日に清少納言を試したのではなく、定子はただ雪が見たので、ユーモアを含んだ指示の出し方として「香炉峰の雪いかならむ」と尋ねたのではないかと推察していた。

### 2) 受講生の感想

- ・今回の班は分量が少ないのにしっかり考察されていて聞きやすかった。
- ・高校の時の授業では「清少納言、さすがだなあ」と思っていたが、今思うと理解できている定子様もすごいと感じた。
- ・もう少し『白氏文集』について調べたかった。
- ・他の章段と関連づけて読み進めたところは良かった。
- ・本文には明確に書かれていないがわかっていることを

照らし合わせて年代を考察していたのを見て、本文に書かれていることだけに注目するのではなく、様々な方面から考察することで、ぼんやりとした抽象的なイメージがくっきりした解釈に繋がると感じた。

- ・短い章段を深く考察しているなど思った。解釈がいくつかある部分を、他の章段を調べたり、人物の心情を考えたりして自分なりの意見を示しているのが良かった。
- ・他の章段や研究者の意見を調べるだけでなく、それをたよりに自分の考えを深めて行きたいと思った。

### 3) 考察

本章段は分量が少なく、しかも高校までで習っているため、発表班はかえって発表内容に苦勞した様子も見られた。しかし、章段に描かれた時期についての考察や、定子や定子付きの女房達への漢籍の知識という問いを得て、先行研究を読み比べたり、他の章段を読んだりする中で多くのことを学べたようである。発表者以外の受講生も、他の章段を読むことで担当章段への理解を深めるという方法を納得し、これからの『枕草子』の読解に繋げようとする意欲のあるコメントが見られた。しかし、本段については、「香炉峰の雪」について、『白氏文集』原典に当たり、詞章と清少納言の行動との関係を考察できなかったことは残念であった。

## VI 成果と課題

### 1. 成果

#### 1) 受講生

「V」で示した以外の受講生の感想を下記に整理して紹介する。①は音読・傍注テキストについての感想である。それぞれに感想を書いた章段を示した。②は授業の最終回で、全15回の授業を振り返って書いた感想である。

#### ① 音読・傍注テキストについて

- ・傍注テキストがとてもわかりやすく、古文の本文と照らし合いながら説明や現代語訳をする方が自分の中で古文をかみ砕いている感じがして良かった。(第28段「にくきもの」)
- ・前に立つと緊張して音読のペースが速くなってしまった。(第39段「節は五月にしく月はなし」)
- ・助詞で声が上がらないようにするなど注意されたところは意識できたと思う。(第39段「節は五月にしく月はなし」)
- ・わかりやすく、端的にと意識したが、話している側と聞いている側には体感時間に差があると思うので、無駄な説明や言葉があったかもしれないと思った。(第

39段「節は五月にしく月はなし」)

- ・ただ資料を読むだけでなく、解説を付け加えながらしてくれたのでわかりやすかった。(第39段「節は五月にしく月はなし」)
- ・音読の声が大きく、間がちゃんとあって聞いている側も内容を取りつつ音読を聞くことができた。(第119段「あはれなるもの」)
- ・音読の練習をもっと沢山しておけばよかったと後悔した。あまり音読の大事さをわかっていなかったが、事前指導で読まなければわからないこともあると実感したので、これからは音読に力を入れようと思った。(第137段「五月ばかり」)
- ・少しでも不安要素があると、発表を聞いている人にそれが伝わってしまうのだと感じた。(第182段「村上の先帝の御時に」)
- ・説明付きの音読の時に、主語であったり補足がもう少しあれば、話の中の情景が浮かんでくると思う。音読にも関係していると思うが、話に入り込めるような音読、説明が大切だなと思った。(第313段「大納言殿まゐり給ひて」)

#### ② 授業全体を振り返って

- ・私は古典の意味を捉えることが苦手であったが、事前指導の時に教えてもらった場面を想像しながら読むことをすると、理解がしやすくなった。音読の意義と大切さが知解できたので、これからも続けて行きたい。
- ・その章段だけを読んでも話の内容が分からないことが多かった。授業では有名な章段ばかりがピックアップされていたが、初めから人物像や時代背景を探りつつ読むと、より深く枕草子を味わえるのだろうと思った。教師になっても、その作品をまず調べ、出てくる人物やその時代背景を知ってから授業をしようと思った。
- ・自分はこれまで古典を、一つの章段が授業で取り扱われていたらその章段のみで読み解こうとしていた。しかし、ほとんどの章段が枕草子では他の関連章段または漢文(白氏文集)が関わっていて、一つの章段のみで読み解こうとしていた高校の古典授業を批判的視点で見られるようになった。
- ・教師がする音読は、子どもがする音読と違い、内容を深く理解した上で、その理解した内容を込めた音読でなければならないとわかった。また、そのような音読をするためには、よく練習することが必要であると分かった。
- ・日記の章段の背景を突き詰めていくと、深い学びに繋がると感じた。  
音読の意義を今まで全くわかっていなかったけど、事前指導に行って、読み方を自分で考え、指導を受けると、どう読んだら本文に色をつけられるかがわかった。

本文をきちんと解釈して音読練習をしっかりしたい。  
いろいろな文献を読むと、知らなかったことが沢山でてきたので、忘れないように再度復習をしたい。

上記のように、音読の方法とその効果については、多くの学生が事前指導と演習発表を通して徐々に実感し、古文そのものの言語感覚への接近が見て取れた。事前指導で指摘し改善された箇所であっても、教壇に立って発表してみると、読む速度が速くなったり、誰と誰の会話なのか等、内容を反映した音読が十分できなくなる場合もあった。そうした問題点も、2回の発表を経験して、受講者それぞれが音読に対する課題を少しずつ自覚し、継続して音読することの重要性に気づけたようである。

また、本授業では主に日記的章段から、歴史的事実をふまえた『枕草子』の読解の必要性を再確認することができた。受講生は、『枕草子』が定子をめぐる宮廷での出来事を描いた随筆であると高校までの学習で知っているが、定子の生涯についてはほぼ全員が初めて知ったという意見だった。歴史的事実や研究成果を踏まえて考えることは、本学国語科の学生は案外苦手としているが、日記的章段を読解する作業を経て、約1000年前の遙か昔に生きた登場人物が実在した実感が得られたようであった。以上のように、作品が描かれた歴史的背景を知ることが『枕草子』の諸段の読解に役に立ち、文学作品そのものへの評価も変わるという成果を得た。

## 2) 教員

古典教員は、学生や教科教員に対し、基本的な文献の紹介や研究方法の指導をすることができた。そして教科教員から教員養成のための授業展開の方法を学ぶことができた。

一方、教科教員は、古典教員から古典研究の専門的関心と研究方法について学ぶことで、古典の面白さを賦活することができた。また、小・中・高等学校の授業に対する知識があるため、教員養成のための授業として学生を指導することができた。

上記の異なる研究対象を持つ教員が同時に受講生に対応することで、学生は学びを深化させることができた。

## 2. 課題

学生の古典観や、古典教育観について改善傾向は見られるが、質・量とも不十分である。本授業では『枕草子』の読解を通じて、古典をなるべく原文のまま理解することを体験させた。受講生の古典読解・授業開発のための手がかりになった手応えはあったが、これをいかに学生自身で継続させていけるかは、授業外の時間に個々で古典を多く読む必要がある。

また、授業開始当初の予定としては、『枕草子』の読

解のために、同時代を記述した歴史物語である『大鏡』や『栄花物語』、藤原行成の日記『権記』などをも読み、事実関係の確認や描写の比較をさせることを告げていたが、読みこなすまでに至らなかったのは残念であった。本授業には小学校・中学校教員を志望する学生が混在しているため、受講生の中には古文が苦手であったり、そもそも古典が不要だという意識が強い者もいる。そうした学生に、積極的に他の文献を読んでみよう意識させられたとは言いがたい。授業の第1, 2回目あたりで教員から本文を提示するなどして、より具体的に作品の紹介をすることで、未見の古典作品へのハードルを下げるような配慮も必要であろう。

また、本授業では全15回の授業と、学生の発表前の事前指導をすべてTTで行った。古典教員と教科教員が相互に得られるものは大きかったし、教員の学びが即学生へ還元された手応えも得られた。しかし、これらは『枕草子』の音読と読解を中心とした授業内容であるから可能だったのか、その他の作品においてもこの方法は可能なのかを検証し、普遍化・システム化する必要がある。

## 注記

### 注1)

「言語4相」はカール・ビューラー(1983)『言語理論 言語の叙述機能』(脇阪豊ほか訳、クロノス)所収図由来。言語には「言語活動、言語作品、言語行為、言語規則」の4つの相があるという論である。「対話環」は山口喜一郎(1952)『話すことの教育』(習文社)の「表現と理解の弧」と名づけられた図を村井が命名し直したもの。「対話環」は「言語4相」を産出する機能を表し、両者一体であるというのが村井の主張である。村井(2021ab)参照。

## 引用・参考文献

- ・赤間恵都子(2013)『歴史読み枕草子 清少納言の挑戦状』三省堂
- ・勝又基編集(2019)『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』文学通信, pp.37 - 50, p.105
- ・池田亀鑑校訂(1962)『枕草子』岩波文庫
- ・大村はま(1991)「古典への門-平家物語によって-昭和49年」『大村はま国語教室』3巻, pp.157 - 179, p.364
- ・大村はま(2005)『教室に魅力を』, 国土社, pp.122 - 124, 1988初版, 2005年新装版
- ・小島明子(2018)「小・中学校における古典の授業展開力の養成」『鳴門教育大学研究紀要』33巻, pp.107

- ・ 田中重太郎 (1972) 『枕冊子全注釈』 1 - 5 卷, 角川書店
- ・ 萩谷朴 (1981 - 1983) 『枕草子環解』 1 - 4 卷, 角川書店
- ・ 枕草子研究会編 (2001) 『枕草子大事典』 勉誠出版 pp.495 - 496
- ・ 村井万里子 (2021a) 「言語のシステム理論から見た教科架橋型教科教育実践学 1 システムとしての言語 - 「言語 4 相」, 2 システムとしての言語 - 「対話環」」 『学びを広げる教科の架け橋』 菊地章編, 九州大学出版会, pp.46 - 58
- ・ 村井万里子 (2021b) 「第 5 章 国語」, 『教科内容学に基づく教員養成のための教科内容構成の開発』 日本教科内容学会編, あいり出版, pp.105 - 109
- ・ 山本淳子 (2017) 『枕草子のたくらみ「春はあけぼの」に秘められた思い』 朝日新聞出版